

1. 発表者氏名 村本 宗将
2. 学校名 石川県立医王特別支援学校
3. 発表テーマ 「A T・I C Tを利用した効果的な教科指導の在り方」
4. 学校概要

本校は本県唯一の病弱特別支援学校であり、A組（筋疾患の生徒）、B組（慢性疾患 - 心身症等の生徒を含む）、C組（知的障害を併せ有する生徒）が在籍している。A組とB組は体育や一部の選択科目を除くすべての授業で共に授業を受けている。異なる障害の児童生徒に等しく教育効果を上げるためにA T・I C T等を授業に導入し、授業内容の理解、定着を図るべく教科指導に取り組んでいる。

5. 発表概要

本研究では高等部のA組、B組を対象とした音楽、体育、生物の授業での実践事例を紹介し、そこから得た成果、課題から病弱特別支援学校における効果的な教科指導の在り方を考えた。

・音楽における実践

A組の生徒に対しては、教師が生徒の手を持って楽器を演奏する支援を行っていたが、自力での楽器の演奏は困難であった。A組の生徒にタブレット端末などを用いることで、B組の生徒とともに自力で合奏する取り組みを実践した。

・体育における実践

A組の体育は、生徒の指示により教師が競技を代行する形式で行われることが多かったため、本人の意思が100%生かされることが少なかった。そこで、自力で競技に参加するための装置を製作することにより、本人の意思をより反映させる取り組みを実践した。

・生物における実践

A組の生徒は発言を活発に行えるが実験・作業が困難であり、B組の生徒（緘黙症）は実験・作業を十分行うことができるが教師の発問等に対し筆談のみでしか応答ができない。I C T等を用い、これらの異なる障害を持つ生徒が共に効率的に学べる支援を考えた。

6. 成果と課題

音楽の実践では、A組の生徒がタブレット端末の演奏ソフトをリングマウスで操作することで、B組の生徒とともに演奏することができた。自らの力で演奏できたことから、自分の演奏に自信を持つことができ、達成感へとつなげることができた。体育の実践では、指ひとつでボールを押し出す装置を授業に導入し、生徒が自力で野球ゲームやボーリングゲームを行うことができた。生徒からはこの装置をもっと改良してほしいという要望がでた。この発言から授業への参加意欲やより強い向上心を伺うことができた。生物の実践では、発表支援として、生徒がP Cやタブレット端末を活用することで、A、B組の生徒が視聴覚的情報を取り入れ、お互いに理解を深めることができた。

これら教科の実践により、A T・I C Tを利用することで生徒の主体的な活動を引き出すことが可能となった。これが授業への参加意欲を高め、教科指導を効果的に行うことにつながった。